

## 国際文化学部

## I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2019年度大学評価結果総評】(参考)

国際文化学部は、順次性・体系性が強化された新カリキュラムを始動させるに至り、教育課程のほとんどの項目で改善が見られた。4つのコースの科目群を拡充するとともに、より幅広く深い教養を培うために柔軟な履修ができるよう、新たな履修ルールを制定したことは大いに評価できる。従来の高大連携に留まらず、学部と研究科の連携を深め、学部3、4年次に大学院の授業が履修できるようにしたことは革新的な試みである。学部の特長であるSA/SJプログラムも、国際文化情報学会も定着し、学位授与方針にもある「文化情報」の受発信の機会が教育課程の中で十分に得られるようになっている。学部の教職員および学内の他部局との連携を密にとり、万全の態勢でSAプログラムを運営していることも高く評価できる。新カリキュラムの導入、自宅でのeラーニングの推進、大型授業での履修人数の制限などの積極的な取り組みが報告されており、今後はこれらの学習効果の検証を見守りたい。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2018年度に策定された新カリキュラムが2019年度から導入されたことに伴い、実際の運用にあたっての問題点を洗い出し、その解決にあたった。とくに2年次からの演習(ゼミ)履修を可能とするにあたり、既存の3・4年次選抜との整合性を考慮して日程および手順を設定するとともに、演習と必修科目との時間割の重複が生じた場合に後者を優先させることを決定するなど、学生間の公平性および学部カリキュラムの順次性・体系性という観点から、教授会における慎重な検討と、それにもとづくルールの策定を行った。また大規模授業における履修人数制限にあたっては、コースの卒業要件に関わる科目について該当コースの所属学生を優先するという方針にもとづき抽選選抜作業を実施した。自宅でのeラーニングの推進に関しては従来一部教員の努力に負うところが大きかったが、2020年度における全面的なオンライン授業実施という状況下での学部所属教員の経験を集約し、分析・検証を行う予定である。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際文化学部では、2018年度に策定された新カリキュラムの導入に伴い、2019年度は実際の運用におけるルール策定を行った。演習(ゼミ)履修における優先順位の決定や、大規模授業の履修における抽選選抜作業の実施など、学生間の公平性とカリキュラムの順次性・体系性が慎重に検討されたルールの策定は、学部教育方針の実現のための優れた取り組みである。また、自宅でのeラーニングの推進に関して、2020年度における全面的なオンライン授業実施による学部所属教員の知見の集積が期待される。

## II 自己点検・評価

## 1 教育課程・学習成果

## 【2020年5月時点の点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S    A    B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

教育課程の編成・実施方針に基づき、全ての学部科目の基礎となる「入門科目」、学部の専門的な学びの基本となる視野や方法論を身につけるための「基幹科目」が配置され、その上で、ICTを駆使してさまざまな文化情報を収集・整理・分析・編集するための能力育成をめざす「情報科目」や、言語に関する基本的な知識を身につける「言語科目」、実践的なコミュニケーション能力を養う「メディアコミュニケーション科目」、そして主に四つのコースから成る「専攻科目」が提供されている。また、初年次転換教育としての「チュートリアル」、コミュニケーション能力を高め異文化への理解と共感を深めるための「SA/SJプログラム」、学生がそれまでの総合的・学際的な学びを経て自らテーマを定め専門的に探求する「演習」「卒業研究」のいずれもが、同方針に基づくものである。

## 【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度入学生より新カリキュラムが適用となったことに伴い、その実際の運用を見守るとともに問題点の修正を図った。具体的には2年次からの演習履修を2020年度から可能とするにあたり、履修選抜の日程や手順について教授会におい

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

て慎重な検討と議論を重ね、具体的なルールの設定を行った。		
<b>【根拠資料】</b> ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際文化学部カリキュラムツリー <a href="https://www.hosei.ac.jp/application/files/5215/8572/2302/Curriculum_tree202004.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/files/5215/8572/2302/Curriculum_tree202004.pdf</a></li> <li>・国際文化学部カリキュラムマップ <a href="https://www.hosei.ac.jp/application/files/1115/8573/9180/Curriculum_map202004_2.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/files/1115/8573/9180/Curriculum_map202004_2.pdf</a></li> </ul>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・演習の履修年次前倒しにかかる追加検討事項について（2020年度第7回教授会資料）、演習選抜について（同第8回教授会資料）</li> <li>・年度末報告書（演習・卒業研究運営委員会）（2020年3月9日付）</li> </ul>		
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	<b>S</b>	A B
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>学部理念・目的および教育目標を達成するため、ILAC科目にも学部独自の必修科目がおかれ（情報リテラシーI、IIや外国語5～8）、体系的に編成されている。学部専門教育科目については登録したコースの専攻科目を4科目以上修得することとし、計画的かつ体系的な履修が促されている。また所属するコースを問わず「地域文化研究関連科目」の履修を義務付けることによって、SA前後の学びがより効果的に統合されている。また、卒業所要単位の見直し作業を通じて、学びの順次性・体系性が再確認された。</p>		
<b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。		
2019年度入学生より可能となった2年次における演習履修に関して、カリキュラムの順次性・体系性の観点から、必修科目との重複が起こった場合は必修科目の履修を優先することを決定した。		
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際文化学部 履修の手引き <a href="https://www.hosei.ac.jp/kokusai/togopage/2020risyu_tebiki/">https://www.hosei.ac.jp/kokusai/togopage/2020risyu_tebiki/</a></li> <li>・年度末報告書（演習・卒業研究運営委員会）（2020年3月9日付）</li> </ul>		
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	<b>S</b>	A B
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>6群にわたるILAC科目から44（2019年度入学生からは46）単位以上、学部専門教育科目82（同86）単位以上、いずれも偏りなく履修することで幅広くかつ深い教養と豊かな人間性が涵養されるよう教育課程が編成されている。専門教育科目においては、入門、基幹、情報、言語、メディアコミュニケーション、専攻科目がバランスよく配置されている。2年次生からのコース選択に際しては、学部における学びの方向性を担保しつつ、自分が登録したコース以外のコースから一定単位数の修得が義務づけられており、学部が標榜する「国際社会人」に不可欠な幅広い教養が培われている。また専門教育科目としての自由科目（総合科目、他学部公開科目、ESOP科目など）が卒業所要単位としては18（2019年度入学生からは20）単位まで修得可能であり、幅広い知識の獲得や総合的な判断力の養成に寄与している。</p>		
<b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。		
2019年度より大学院国際文化研究科設置科目の一部（計29科目）を学部3・4年生に専門科目（自由科目）として履修を認めたことに伴い、主にゼミ担当教員を通じた履修の促しを学生に対して行った。また学部英語科目運営委員会によって、ILAC科目を含む英語科目について総合的な観点から継続的な検討・改革が実施されている。さらに新たに制定した学部アセスメント・ポリシーにおいては「教養教育段階」を項目化し、学部教育体系のなかでの位置付けを強化した。		
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度末報告書（国際文化学部英語科目運営委員会）（2020年3月9日付）</li> <li>・国際文化学部アセスメント・ポリシー <a href="https://www.hosei.ac.jp/kokusai/shokai/policy/3224/">https://www.hosei.ac.jp/kokusai/shokai/policy/3224/</a></li> </ul>		
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	<b>S</b>	A B
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <p>初年次教育科目としては「チュートリアル」を配置して基礎的なアカデミック・スキルを少人数制で指導し、高校から大学教育への橋渡しを行っている。また「情報リテラシーI」「同II」「国際文化情報学入門」を必修とすることで、学部情報教育の基礎づくりや、専門教育への導入を図っている。「チュートリアル」で学生が身につけた能力は、「チュートリア</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ル自己評価シート」記入により学生自身が評価するが、その集計結果、および担当教員へのアンケート結果をFD委員会が分析し、教授会で共有することによって、初年次教育の重要性を確認し、その改善に役立てている。高大接続については、高大連携校（関東国際高等学校）からの特別聴講生を受け入れており、特別聴講生が正規入学した場合、特別聴講生として履修した単位を卒業所要単位として認定している。また法政大学国際高校における高大連携科目に対しても、学部専任教員を継続的に配置している。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

型コロナウイルス感染症拡大の影響により実施不可能となったFDミニセミナーに代えて、第11回教授会において「チュートリアル自己評価シート」および教員アンケートの集計結果をもとに、初年次教育についての詳細な現状分析と積極的な意見交換が行われた。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度FD委員会活動報告書（2020年3月19日付）
- ・チュートリアル教員アンケートおよび受講生の自己評価シートの集計結果について（2019年度第11回教授会資料および議事録）

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

学部創設時からSAプログラム、2012年度からはSJプログラムが開講されている。さらに、2017年度から、海外フィールドスクール（FS）が開講されている。グローバル教育センター主催の「グローバル・オープン科目」「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」は、2015年度より自由科目として単位認定している。授業では、ILAC科目4群（外国語）のほか、主に「言語科目」「メディアコミュニケーション科目」により、言語に関する知識および外国語の習得を目指す。「専攻科目」では、主に言語文化／国際社会コース科目群が、自国の文化を相対化しつつ文化情報を受発信できる「国際社会人」育成教育を実践する。また、SJ奨学金制度（SJ国内研修への一般学生の参加を奨励）や、学部所属交換留学生歓迎会の開催などにより、留学生との積極的な交流が行われている。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ラオス国立大学と海外フィールドスクール（FS）協定を締結した。また海外フィールドスクールの実施校候補として、マレーシア科学大学と交流協定締結を承認した。
- ・FS出発前の事前学習に資する目的で、関連図書からなる海外フィールドスクール（FS）文庫を学部資料室に設置し、教員および学生の利用に供した。
- ・将来におけるSJの実施のあり方について、SJ委員会および留学生受入・支援委員会を中心に検討を開始し、学部教員に開かれた拡大会議を開催した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「ラオス国立大学との海外FSプログラムMOU締結について」（2019年度第2回教授会資料）
- ・「マレーシア科学大学との協定締結について」（2019年度第10回教授会資料）
- ・海外フィールドスクール文庫設置について（2019年度第6回教授会資料）
- ・SJ拡大会議報告（2019年度第11回教授会資料）

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

インターンシップ科目を独自の科目群として配置し、本学部と親和性が高い企業に勤める方々を講師として招き、学生のキャリア意識醸成に努めている。また、例年通り、学部卒業生を講師とする就職セミナーも開催され（2020年2月21日、「先輩に聞く自分にあった仕事の選び方とは？」をテーマとする座談会と、懇親会形式での個別相談の2部構成。講師10名、参加学生は約80名）、卒業生の経験に基づく実践的な指導が行われた。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・国際文化学部「卒業生による就職セミナー」の開催について（2019年12月24日掲載）  
[https://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/zaigaku/191224\\_1/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54](https://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/zaigaku/191224_1/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54)
- ・実施報告「卒業生による就職セミナー」（2020年2月22日）

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S A B
<p><b>【履修指導の体制および方法】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年次生履修ガイダンスを実施し、履修ルールや注意点などを事務担当が説明。また、教養教育の観点からILAC科目履修時の心得を記した資料（「ILAC科目の意義と望ましい履修計画」）を配付。</li> <li>・新2年次生に対しては前年度末に履修ガイダンスを実施している。学部の特徴であるコース制の意義と履修の心得を、学部の教育理念と関連づけて説明。履修ルールや注意点については事務主任が説明。英語科目（ILAC科目等）、学部のカリキュラム体系におけるSAプログラム、演習や卒業研究について、概要や履修の心得、注意点等を説明。本学グローバル・プログラムの案内も実施。</li> <li>・冊子シラバスの巻末に掲載されている教員のオフィスアワーを利用して、学生は履修について個別に相談することができる。</li> <li>・3、4年次生は所属する演習の担当教員に相談することが多い。</li> <li>・執行部会議ですべての学年につき低単位修得者を確認し一部面談しているが、その際には履修指導や履修相談を行っている。</li> <li>・授業科目の履修にあたって学生は「履修の手引き」を熟読し、不明な点があれば国際文化学部窓口にて相談することも推奨されている。</li> <li>・SA参加学生（および保証人）を対象に学部独自のSAリスク周知ガイダンスを開催し、留学に伴うリスクについての解説を行うとともに、授業支援システムを利用した理解度チェックの受験を全ての参加学生に義務付けることで、説明事項についての理解・認識の徹底を図っている。</li> </ul>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>春学期開始時において主に新入生に対するピアサポートによる履修支援を目的とするラーニング・サポーター制度を設定した。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2019年度春学期ラーニング・サポーター開設スケジュールについて  <a href="https://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/zaigaku/190401_01/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54">https://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/zaigaku/190401_01/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54</a></p>	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>学習指導は原則として個々の授業担当者に任されており、授業時間内はもとより、授業前後やオフィスアワーなどを利用した授業時間外でも随時柔軟に行われている。チュートリアル、語学授業、演習などは少人数制で双方向的な授業であり、履修指導とともにきめ細かい学習指導が実現されている。また教員や学生は授業支援システム等を活用し、それらは学習指導を含めたコミュニケーションの場として機能している。SAやSJの事前指導においてはとくに語学学習や異文化理解・コミュニケーションに関して、担当教員が学生たちに適宜適切な指導を行っている。なお中国語の授業では「ブレンド型学習」が行われ、自宅でのeラーニングの学習状況は授業の前にメールで教員に自動送信され、教員は学生の学習状況を的確に把握しながら日々の指導に当たっている。SA留学中は、SAポータルサイト上で学生が提出する月例報告にもとづき、各担当教員がきめ細かい指導を留学中の学生に対して行っている。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・法政大学学習支援システム（Hoppii） <a href="https://hoppii.hosei.ac.jp/portal">https://hoppii.hosei.ac.jp/portal</a>  （旧授業支援システム（H'études） <a href="https://hcms.hosei.ac.jp/">https://hcms.hosei.ac.jp/</a></li> <li>・法政大学SAポータルサイト <a href="https://hosei-ryugaku.net/">https://hosei-ryugaku.net/</a></li> <li>・法政大学中国語教室 ポイント学習中国語初級デジタル版 <a href="http://fic.xsrv.jp/hosei/">http://fic.xsrv.jp/hosei/</a></li> </ul>	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>各授業のシラバスの「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」欄は、学生の学習時間（予習・復習）を確保する一定の方策となっている。学部独自の取り組みとして、「ブレンド型学習」による予習・受講・復習のサイクルが機能している。また、ILAC科目の英語授業では「リスニング・ハンドブック（LH）」（学部英語科目運営委員会発行）を授業時間外に活用するよう指導している。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学部英語科目運営委員会によって「リスニング・ハンドブック (LH)」(印刷版およびウェブ版)の修正(リンク先・文言の修正)が行われた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・リスニング・ハンドブック <http://volta.fic.i.hosei.ac.jp/rbl/english/>

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S  A B

【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入(取組例:PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等)。

・中国語科目では、ブレンド型学習が定着している(オンデマンドでの予習・復習+教室の授業によるチェックや反復)  
 ・「情報アプリケーションⅡ」「実践国際協力」などでは、PBLの考え方にに基づき授業が行われている。  
 ・演習(ゼミ)をはじめ、基幹科目(「ジェンダー論」「国際文化協力」ほか)、専攻科目(「ヒューマンインタフェース論」「現代美術論」「スペイン語圏の文化Ⅰ・Ⅱ」「国際関係研究1・2」ほか)など、多様な科目でアクティブ・ラーニングの手法を用い、授業が進められている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・国際文化学部 講義概要(シラバス)

⑤それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S A B

※どのような配慮が行われているかを記入。

語学、演習、および情報実習科目については、1授業あたりの学生数が配慮されている。

語学のうち、ILAC科目の必修英語・諸外国語については、市ヶ谷地区時間割編成委員会により、クラス授業規準人数の厳守の徹底が確認されている。学部専門教育科目については、「英語コミュニケーション」は1クラス24人以下を厳守したクラス編成を行っており、他の科目については、受講を選択する人数が少ないため、実績として少人数が守られている。

演習については、3月の受講者選抜の際に募集人数を明示し(3年生については10~12名、2年生・4年生は若干名)、2年次履修を可能とした後も履修者の最大人数(24名)に変更は加えていない。受入人数に関わる学部ルールは、2010年度2月教授会で審議・承認された。

情報実習科目については、抽選により受講者を決定する。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度からの新カリキュラム実施に伴い、教育の質および学修環境の整備を目的として1授業あたりの履修人数を200名未満に抑えるにあたって、各コースの卒業要件に係る科目に関しては該当コースの所属学生を抽選において優先した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2019年度演習選抜について [https://www.hosei.ac.jp/kokusai/togopage/190122\\_01/](https://www.hosei.ac.jp/kokusai/togopage/190122_01/)

・2014年度第14回学部長会議資料No.9「2015年度時間割編成方針」

・2019年度春学期履修ガイド(国際文化学部学生用)

・国際文化学部 履修の手引き

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

【確認体制および方法】※箇条書きで記入。

・すべての授業の成績評価基準はシラバスに明記され、教員はその基準に則して公平・公正に成績評価ならびに単位認定を行っている。  
 ・単位認定のために定められた義務を果たしたにもかかわらず、与えられた評価が妥当ではないと考える学生は、期間内に学部窓口へ申し出ることができ、正当な理由が認められた場合には成績調査が行われる。  
 ・成績と単位認定は個々の担当教員の責任において行われるが、成績や単位の変更が必要な場合には教授会で審議される。  
 ・SA期間中の成績は所定の期日までに本学部へ送付され、担当教員はそれぞれの方式に従って単位認定を行い、SA委員会ならびに教授会で審議を行う。  
 ・派遣留学生の単位認定については、当該言語圏の専任教員が授業内容(シラバス)、報告書、成績基準、成績証明書、授業時間そのほかの情報を精査し、認定が妥当と判断されれば教授会で審議を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>・高大連携による協定校の生徒が、高校在学中に修得した本学部の単位を新たに大学の単位として認定する場合(上記 1.1 ④)も、教授会で審議を行う。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>学部ないしコースとしての到達目標設定の前提としてのミニマム・リクワイアメントについて検討を行い、授業の到達目標と成績評価との連関を明確化するために、授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする旨をシラバスに明記することを決定した。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国際文化学部 履修の手引き</li> <li>・ミニマム・リクワイアメントの設定について (2019年度第10回教授会資料)</li> </ul>	
② 厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>大学が定めたS(旧A+)評価の割合をガイドラインとして成績評価を行うことが教授会で確認されており、その通知は成績評価依頼とともに学部科目を担当するすべての教員に送付されている。個々の科目の成績分布や学部別の成績分布については、毎期末のGP集計表により教員に周知されており、教員は担当科目のみならず他科目の分布も知ることができる。また2014年度にスタートした「グローバル化に対応した厳格な成績評価の更なる推進とGPA活用の課題」は、本学部においても教授会での意見聴取が行われてきたが、2016年度には、新制度の2018年度導入に向けての意見聴取が行われ、厳格な成績評価への取り組みの一環となった。定期試験などにおける不正行為やレポート等における剽窃行為について教授会を通じ、また学部HP・掲示板にて注意喚起を行うとともに、チュートリアルなどの授業での指導に努めている。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>特になし</p>	
③ 学生の就職・進学状況を学部(学科)単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1月に学部独自の「進路調査アンケート」を実施し、学生の就職状況(実数、就職先、内定先など)の把握に努めている。</li> <li>・内定先や卒業後の進路に関する卒業生メッセージ、ならびに主な内定先の内訳を表すグラフや企業名(キャリアセンターによる「卒業生就職先一覧」データに基づく)を学部パンフレットに記載し、受験生や学生のみならず教員にも周知している。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進路調査アンケート</li> <li>・法政大学国際文化学部パンフレット</li> </ul> <p><a href="https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-8">https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-8</a></p>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
① 成績分布、進級などの状況を学部(学科)単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・在籍者数に基づき1年次から2年次までの「進級者」「休学による進級留年者」「進級留年者」、ならびに3年次「進級者」「休学による進級留年者」「留学による進級留年者」「進級留年者」「再試験当事者」「交換留学生」、そして4年次「卒業生」「休学による卒業留年」「留学による卒業留年」「卒業留年」「再試験当事者」の人数を記載した資料が2月教授会に提出され、審議・承認が行われる。</li> <li>・総代・成績優秀者候補者を検討するためGPA累積順の上位20名の名簿が2月教授会資料として用いられ、成績分布データ把握の一環となっている。</li> <li>・「開かれた法政21」奨学・奨励金受給候補者選出や「SA奨学金B」およびJASSO奨学金受給候補者選出に際してもGPAを記載したリストが作成され、教授会メンバー全員による状況把握に寄与している。</li> <li>・「成績優秀者他学部科目履修制度」において、履修候補者を選出する際には2年次から4年次までの各学年における累積GPA上位5%以内の学生をリストアップし、3月教授会で審議・承認を行っている。</li> <li>・GPAとGPCAの分布データは各教員に提供されており、入学センターとの情報交換会(6~7月)でも入試経路別に過去3年間の在学GPAなどのデータが共有されている。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>・「2019年度進級・卒業判定について」「学位授与式の総代候補者選出および成績優秀者学部表彰について」「進級・卒業判定名簿」（2019年度第10回教授会審議資料）、</p> <p>・2020年度成績優秀者他学部公開科目履修候補者について（2019年度第12回教授会回覧資料）</p>	
<p>②「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。</p>	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>国際文化学部では、外国語学習や異文化理解の促進を各種ポリシーにおいて重視している。また、日本の企業の3分の2が英語圏以外の国々を最重要拠点とするなど、海外に精通した人材に対する社会的ニーズは多様化していることから、7言語圏10か国で実施しているSAプログラムを基軸とした学習成果を測定するための指標として、「諸外国語科目における学年ごとの到達目標」をドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語の計6言語それぞれについて定めるとともに、英語についても（諸外国語に比してほぼ1段階上にあたる）到達目標を設定している。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・国際文化学部 履修の手引き</p>	
<p>③「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。</p>	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <p>個々の授業における小テスト、リアクション・ペーパー、学期中の各種提出物、学期末の試験やレポートによって習熟度や学習成果は適切に測定されている。学生による授業改善アンケートは個別的にも組織的にも確認を行い、大学評価室による卒業アンケート調査報告書は執行部で精査した後に教授会で回覧している。また国際文化情報学会における論文、ポスター、映像、インスタレーション発表により、学習成果が把握・評価されている。英語の学習成果は、1年次7月、2年次7月（SA前）、2年次3月（SA後）にTOEIC®受験の機会を設けることで測定されている。英語以外の言語については、卒業生アンケートにより成果が把握されている。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>「学習成果を測定（把握）する方法」を策定し、「初年次教育」「SA・SJ修了段階（2年次段階）」「3～4年次段階」「卒業時」の各時期における測定（把握）方法と学習成果・学位授与方針とを関係付けて提示した。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2019年度卒業生アンケート調査結果（大学評価室）</p> <p>・年度末報告書（国際文化学部英語科目運営委員会）（2020年3月9日付）</p> <p>・学習成果を測定（把握）する方法（国際文化学部）</p> <p><a href="https://www.hosei.ac.jp/application/files/4715/8563/9686/08_.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/files/4715/8563/9686/08_.pdf</a></p>	
<p>④学習成果を可視化していますか。</p>	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <p>・国際文化情報学会における論文や作品（ポスター、映像、インスタレーション）の発表、および、審査。学会は、主に「演習」での学習成果の公開の場となっている。</p> <p>・上記学会における審査・授賞（各発表部門につき、最優秀賞1件と奨励賞2件）。</p> <p>・上記学会における受賞論文全文・受賞作品概要（写真等）、および全応募作品梗概の、『異文化』（学部紀要）への掲載。</p> <p>・イラストレーションコンテスト。学部パンフレットの表紙には学部教員ならびに事務の審査を経た大賞作品が用いられる。</p> <p>・SA留学後の「SA自己評価シート」「SA体験記」の提出にあたって大学配付のメールアドレスにひもづけられたGoogleフォームを活用することで、学習成果の可視化が試みられている。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>国際文化情報学会ウェブサイトが立ち上げられたことで、今後『異文化』（学部紀要）の電子版などのコンテンツを掲載し、学会活動を通じた学生の学習成果を発信するにあたっての基盤が作られた。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・国際文化情報学会ウェブサイト <a href="http://ibunka.info/">http://ibunka.info/</a></p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・『異文化』第21号(2020年4月)	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初年次教育科目「チュートリアル」については、FD委員会が「チュートリアル自己評価シート」の集計結果および「担当教員アンケート」の分析により学習成果を検証し、その結果をもとに内容・方法の改善に向けての提案を行っている。</li> <li>・「英語1」および「英語7」について、アンケートを実施し、教育課程の改善・向上に向け役立っている。</li> <li>・学部の学位授与方針に直結する演習履修者数や卒業研究の登録者数と提出者数の集計が行われ、演習の開講コースの設定の検討などに役立っている。</li> </ul> <p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 英語科目運営委員会により「英語1」「英語7」に加えて、「英語8」についてアンケートが実施された。</p> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。 ・年度末報告書(国際文化学部英語科目運営委員会)(2020年3月9日付)</p>	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S A B
<p>※利用方法を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部長にはすべての学部科目の自由記述部分がフィードバックされており、各種立案の際には参考資料として活用されている。</li> <li>・各期の授業改善アンケート結果の執行部による検証は、学生の履修指導の方針立案にも役立っている。兼任教員との懇談会などの機会に、学生の授業外学習時間の確保を要請している。</li> </ul> <p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・SA/SJプログラムを中心に置き国際性の涵養に積極的に取り組んでいる点、学部規模から少人数での教育・指導が可能である点、ICT(情報)教育を重視しインターネット上の複数のポータルサイトを活用している点、以上の3点を有機的に関連付け、体系的に構築した教育課程を提供している。なお新型コロナウイルス感染症拡大の影響により2020年度SAが中止となったことに伴い、所期の学習成果の達成に向けて、適切なSA代替措置の設定・実施を進める。</li> </ul>	1.1①

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

## 【この基準の大学評価】

<p>国際文化学部では、新カリキュラムの実施によって、「教育課程の編成・実施方針」に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されている。運用における具体的なルール策定も行われており、カリキュラムの順次性・体系性を確保するものとして高く評価できる。また、ILAC科目と専門教育科目に加え、2019年度からは大学院国際文化研究科設置科目の一部が学部3・4年生に専門科目として提供されており、幅広く深い教養を培うという点で大変優れている。初年次教育については、「チュートリアル」を配置して基礎的なアカデミック・スキルを少人数制で指導しており、「チュートリアル自己評価シート」によって学生自身が自己評価をする取り組みを行っている。新型コロナウイルス感染症拡大の中であっても、実施不可能となったFDミニセミナーに代わって教授会においてその集計結果の詳細な現状分析と積極的な意見交換が行われており、改善にいかしている点は高く評価できる。さらに、学生の国際性を涵養するため、SA/SJプログラムに加え、ラ</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

オス国立大学と海外フィールドスクール協定を締結し、さらに協定校を増やす努力を続けていることは特筆に値する。

学生の履修指導については、主に新入生に対するピアサポートによる履修支援を目的とするラーニング・サポーター制度を設定しており評価できる。また、授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする旨をシラバスに明記することを決定し、成績評価と単位認定の適切性が確認されている。

学習成果については、「学習成果を測定（把握）する方法」を策定し、各年次における測定（把握）方法と学習成果・学位授与方針とを関係づけて提示しており、高く評価できる。

## 2 教員・教員組織

### 【2020年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

#### 【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・学部基幹委員会の一つとしてFD委員会が設置され、当委員会において専門の入門科目のあり方、チュートリアル授業の平準化・成績評価・運営方法の改善等について検討・議論し、教授会メンバーとの情報共有の場として「チュートリアル報告会」が設けられている。
- ・同委員会は随時FD推進のための活動を実施することが「各種委員の職務内容」に明示されている。
- ・オープンキャンパスや出張先の高校などで模擬授業を行った教員は学部メールリングリストにその成果などを報告し、自身の振り返りとともに情報を共有している。
- ・学内外のFDセミナーなど、FDに資する情報を学部メールリングリストに流し、参加を促している。

#### 【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・5月初旬 メール審議にて委員長を決定
- ・05/21 第2回教授会に議案書（報告題）提出『『チュートリアル自己評価シート』実施のお願い』
- ・05/21 第2回教授会に議案書（報告題）提出「授業相互参観の実施について」
- ・06/03 2019年度春学期教員による授業相互参観実施（～07/20）
- ・07/25 「2019年度チュートリアル教員アンケートについて（依頼）」という標題でチュートリアル担当教員にチュートリアル教員アンケートへの回答を学部事務室へ提出するよう、FICメールリングリストを用いて依頼（締め切りは09/10）
- ・11/02 「FD授業相互参観のお願い（FD委員会）」という標題で、2019年度秋学期教員による授業相互参観の依頼および実施要領を、FICメールリングリストを用いて教員に連絡
- ・11/25 2019年度秋学期教員による授業相互参観実施（～01/20）
- ・12/17 第8回教授会に議案書（審議題）提出「2020年度シラバス・チェックについて」
- ・2月上旬（演習科目シラバス）から3月下旬にかけて第三者によるシラバス・チェック実施
- ・03/10 第11回教授会に議案書（審議題）提出「2019年度教員による授業相互参観実施状況報告書（案）」
- ・03/10 第11回教授会に議案書（報告題）提出「チュートリアル教員アンケートおよび受講生の自己評価シートの集計結果について」
- ・03/19 執行部に「2019年度FD委員会年間活動報告書」を提出

#### 【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響のためFDミニセミナーが実施不可能となったため、第11回教授会のなかで「チュートリアル自己評価シート」および教員アンケートの集計結果にもとづく初年次教育についての詳細な現状分析と積極的な意見交換が行われた。
- ・9月24日に個人情報（学生の提出書類や会議での配付書類における性別や通名）の取り扱いをテーマとする教授会懇談会を開催し、教員間における問題意識の共有や対応策についての議論・検討を行った。

#### 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度FD委員会活動報告書（2020年3月19日付）
- ・教授会懇談会の開催について（2019年度第5回教授会資料）

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

「FIC オープンセミナー」として、講演会、シンポジウム、討論会など多彩な形式によるイベントを数多く開催することによって、研究発表の場を提供するとともに、学内外の人的交流を推進し、研究活動の活性化を図っている。社会貢献の観点からは、学内の教職員や学生だけでなく、学外の一般聴衆に対しても上記イベントの公開を行っている。また2017年度には、学部所属教員を指導教員とする学外からの国内研究員による研究発表会を開催し、研究成果の学部への還元を行った。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

・「開発・環境・人権 インドネシアの石炭火力発電事業をめぐる人権侵害と日本の政府開発援助（ODA）——現地の農民とNGOからの報告」（4月13日）、「Habitat for Humanity——世界の住居環境改善のために一法政大学生によるインドネシア活動報告」（4月27日）、「山崎阿弥 講演会とワークショップ～音を迎えに～」(6月19日)、「人生に文学を。」(6月29日)、「人形師岡本芳一と『百鬼どんどろ』——渡邊世紀監督の2つの映画作品を媒介に」(7月6日)、「合評会『平和を我らに——越境するベトナム反戦の声』(12月14日)、『『息衝く』上映会——「震災・政治・宗教」と表象の可能性」(12月20日)が開催された。

・さらに新規の取り組みとして、大学院国際文化研究科との共催で、教員・大学院生・学部学生の学術的交流を図ることを目的とし、(学部所属の)「専任教員による研究発表会」がFIC オープンセミナーとして実施された(7月23日、12月10日)。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

・『異文化』第21号(2019年4月)

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・国際文化学部には所属する教員の専門分野はきわめて多岐にわたるため、「FIC オープンセミナー」の開催・参加は互いの研究領域・テーマを知り、知的刺激を与え合う絶好の機会となっており、領域横断的な新規企画につながるとともに教員組織の協働性を強化するという好循環が期待される。	2.1②

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
特になし	

**【この基準の大学評価】**

国際文化学部のFD活動については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響のためFDミニセミナーが実施不可能となったが、教授会で「チュートリアル自己評価シート」および教員アンケートの集計結果にもとづく初年次教育についての詳細な現状分析と積極的な意見交換が行われており、高く評価できる。

また、「FIC オープンセミナー」として多彩な形式によるイベントを数多く開催し、研究発表の場を提供するとともに、社会貢献の一環として学外の一般聴衆に対しても公開し、学内外の人的交流の推進と研究活動の活性化を図っており、大変優れた取り組みである。

**III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書**

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	「自由と進歩」の精神に基づき、異文化間の諸問題に対話の回路を作り、新しい相互理解や可能性を生み出す学識や意欲を持った人材を育成する。
	年度目標	学生や教職員によるさまざまな活動や各種イベントの開催、印刷物やインターネットによる情報発信を通じ、学部の理念・目的の一層の周知を図る。
	達成指標	国際文化情報学会やFIC オープンセミナーなどのイベントを開催し、学部ホームページ、学会ウェブサイトと学会紀要『異文化』を関連づけて利用するかたちでの情報発信を行う。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
	自己評価	A
	理由	企画広報委員会の継続的な努力により国際文化情報学会のウェブサイトが立ち上げられた。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			ただしコンテンツおよびリンクについては充実の余地が残されている。	
	改善策		国際文化情報学会ウェブサイトにおけるコンテンツの充実を図るとともに、学部がもつ複数の情報発信手段（HP、SNS）の特性を考慮しつつ、複合的な情報発信を推進する。	
		質保証委員会による点検・評価		
	所見		企画広報委員会が入念な準備の下に、国際文化情報学会のウェブサイトを持ち上げたことは大いに評価できる。また、FIC オープンセミナーなどのイベントは、昨年度に続いて活発に行われ、異文化理解や国際協力といった学部理念を学部内外に発信するという重要な役割を果たしていることも、十分に評価されるべきだろう。	
	改善のための提言		国際文化情報学会ウェブサイトにおけるコンテンツの具体案については、担当者の個人的な努力に委ねられている側面があり、教授会での十分な議論が尽くされているとは言えない。学部が持つ複数の情報発信手段（HP、SNS）を用いて、国際文化学部らしい情報発信を行うためには、教授会メンバー全員の一層充実した協力体制の構築が望まれる。	
No	評価基準	内部質保証		
2	中期目標	内部質保証に関して、適切で実現可能な学部内システムを構築し、有効に機能させる。		
	年度目標	学部入試委員会、企画・広報委員会、教務委員会、演習・卒業研究運営委員会、FD委員会の代表者により構成される教育質保証委員会の活動を通じて、年度目標・中期目標の一層円滑な実現を図る。		
	達成指標	執行部と教育質保証委員会との合同会議を開くことで、委員会業務の確認・分担を早期に行うとともに、作業を迅速化させる。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	合同会議において教育質保証委員会の委員長その他の役割の決定が早期かつスムーズにおこなわれたことにより、執行部と委員会の連携体制のもとで業務が順調に遂行された。	
		改善策	執行部と質保証委員会との連携体制を維持しつつ、年度目標・中期目標の順調な実現のため、より積極的な意見交換を図る。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	教育質保証委員会の委員長と委員会内部における役割分担が、スムーズに決定され、執行部との連携の下に、早い段階から業務を遂行できたことは評価できる。	
	改善のための提言	執行部と質保証委員会との連携体制を維持・強化するためには、質保証委員会がチェック機能を超えて制度設計にどこまで関わるべきかなどもう少し本質的な議論をして、教授会の各メンバーが学部内の質保証のあり方について、質保証委員会が果たす役割を理解することが望まれる。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】		
3	中期目標	カリキュラムの順次性・体系的やグローバル化を念頭に置きつつ、教育課程・教育内容の一層の充実を期す。		
	年度目標	2019年度から実施される新カリキュラムの運用を見ながら、改善が必要な点を洗い出し解決していくことで、学生の能力育成と、深い教養に裏付けられた国際性の涵養に努める。		
	達成指標	新カリキュラムの発足によって新たなルールに拠ることとなった科目について、ルール決定時には予測できなかった事態が生じていないかを確認し、もし生じた場合にはルールの改善を行う。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	2年次よりの演習履修を導入したことから生じる選抜における公平性の確保の問題について教授会で共有・議論を行い、共通ルールの策定を行った。	
		改善策	引き続き新カリキュラムの運用を見守り、教員、学生からの反応を継続的に聴取して、問題点の発見と改善に努める。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	2019年度入学者に適用される2年次よりの演習履修の実施年度を前に、教授会において「2020	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			年度演習選抜（日程・手順）」が慎重に検討され、あらかじめ予想される問題点について、踏み込んだ議論がなされたことは大いに評価できる。特に1次選抜の合格者がその権利を放棄して、別のゼミの2次選抜を受けることを明確に禁止したことは、教育の公平性という観点からも、望ましい判断だったと言える。	
		改善のための提言	継続的に新カリキュラムの運用を確認し、実施後の問題点を精査する必要がある。演習に関しては、2年次より実施したことによって、各ゼミの履修人数、あるいは教育内容にどのような影響が生じたかを把握することが望まれる。また、特に2年次のゼミ履修を希望しながら、履修がかなわなかった学生の人数を把握し、その原因が必修科目とのバッティングなどの不可抗力だった場合、教育の公平性という観点に立って、ゼミの配当時間の再検討も必要になるだろう。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
4	中期目標	ICT 機器や新たな教育方法も適切に取り入れながら、双方向の授業を展開するとともに、学生の能力開発を軸とした学修の実質化を図る。		
	年度目標	2019年度から実施される新カリキュラムの運用のなかで、外国語やICT等におけるスキルや知識の積み上げをより確実なものとする。		
	達成指標	新カリキュラムの実際の運用状況を把握し、履修人数以外の改善すべき点について、引き続き洗い出しを行うとともに適切な対応を行う。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	履修人数制限のための抽選選抜作業のなかで、各コースの卒業要件に関わる科目についての問題が明らかとなり、科目が該当するコースの所属学生を優先する対応を行った。	
		改善策	引き続き新カリキュラムの運用状況を把握するなかで、改善すべき点の抽出と対応を実施する。	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		2019年度より導入された履修人数制限の結果を精査・検討し、各コースの卒業要件に関わる問題点が明らかとなり、それに対する適切な対応が取られたことは評価できる。新カリキュラム実施に当たっては、当初は想定されなかった事態が発生するのはやむを得ない面があり、問題点の迅速な洗い出しこそが重要であろう。		
改善のための提言	引き続き新カリキュラムの運用状況を見守り、問題点が明らかになった場合は、迅速な対応が望まれる。そのためには、執行部と各委員会との強力な連携が必要だろう。			
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
5	中期目標	学生の学習に体系的な到達目標を設定することで、卒業生の専門性や学部の教育研究の水準を質的に向上させる。		
	年度目標	学生のスキルや専門性の深化が、学部専攻科目や演習を主軸とする教員の教育活動を充実させ、ひいては教員の研究活動に好影響を与えるという考えを徹底する。		
	達成指標	学部全体としての、あるいはコースとしての到達目標の策定について、前年度までの議論を踏まえつつ、引き続き議論を行い、一定の結論を得る。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	学部ないしコースの到達目標の前提となるミニマム・リクワイアメントの設定について議論を継続して実施し、結論を得ることができた。	
		改善策	学部における体系的な到達目標の設定について、さらに議論を継続する。	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		懸案であったミニマム・リクワイアメントの設定については、議論を重ね、到達目標と成績評価の連関を明確にするために、「到達目標の60%以上」という具体的な数値が示され、それが教授会で承認されたことに対しては、一定の前進であるという点で評価できる。また、大学基準協会から提示された『大学評価（認証評価）結果 分科会案』に対応するために、執行部が詳細な「学習成果を把握（測定）する方法」を策定し、質保証委員会の同意を受け		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			た上で、教授会の承認を得たことも、適切な対応であったと考えられる。	
		改善のための提言	ミニマム・リクワイアメントの設定と中期目標の間にはなお開きがある。次年度は中期目標達成に向けた具体的な目標を立てる必要があるだろう。また、カリキュラム・ポリシーやナンバリング制度との関係でも、ミニマム・リクワイアメントや到達目標の、一層の明確化が求められる。「学習成果を把握（測定）する方法」については、ここで示された指針を実際に測定する際の基本方針を議論・検討し、それを確実に実行していくことが必要だろう。	
No	評価基準	学生の受け入れ		
6	中期目標		アドミッション・ポリシーに基づき、多様な学問的関心および意欲、将来への展望をもった志願者を受け入れ、法政大学全体の教育研究の質的向上に貢献する。	
	年度目標		各種の入試経路について、アドミッション・ポリシーに基づき、また志願者動向や手続き率にも注視しつつ、多様な志願者を受け入れられるよう改善に努める。	
	達成指標		一般入試、特別入試のそれぞれについて、全学入試委員会で提示される課題を慎重に吟味し、学部の中期目標に照らしつつ適切に対応する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		S
		理由		多様な志願者を受け入れる体制をさらに整備するため、法政国際高校国際バカロレアコースの推薦枠を設置した。また入学定員を適切に管理する観点から、募集人員算出表における一般入試枠の再検討を行った。
		改善策		志願者動向や手続き率にも注視しつつ、さらに多様な志願者を受け入れられるよう継続して改善を図る。
		質保証委員会による点検・評価		
所見		多様な志願者を受け入れるという学部理念に基づいて、新たな推薦入試枠を設置し、募集人員算出表における一般入試枠の再検討を行ったことは評価できる。一方、留学生入試枠の拡大については、他学部とは一線を画し、当面は見送ることを決定した。これは、今後のS Jのあり方という学部独自の理念と照らし合わせた上での留保であり、将来の展望に基づく適切な対応であったと考えられる。		
改善のための提言		留学生入試枠の拡大は当面見送ったものの、なお、議論の余地を残しており、学部入試委員会や教授会での継続審議が望まれる。今後のS Jのあり方についても、引き続き検討されるべきであるが、その際、留学生入試枠の拡大の是非、あるいは予算定員と文部科学省定員との関連でも議論されることが必要だろう。		
No	評価基準	教員・教員組織		
7	中期目標		学部の理念・目的により即応した教員組織を目指すとともに、その中で教員間の有機的な連携が図れるようにする。	
	年度目標		研究、教育、学部運営の3方面から、教員の協働（coproduction）の一層の円滑化を図る。	
	達成指標		学部の理念・目的に即応し、円滑な協働を可能とする補充人事等を実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		S
		理由		学部の理念・目的に沿って、研究・教育・学部運営の3方面および年齢バランスに配慮した補充人事が、慎重かつ適切におこなわれた。
		改善策		次年度においても本年度同様に適切な補充人事を実施する
		質保証委員会による点検・評価		
所見		補充人事が適切に実施され、学部の理念・目的が改めて確認されたことは評価できる。また、例年通り、教授会メンバーの仕事の分担表が、早い段階で各個人に示され、委員会単位の共働もおおむね円滑に行われたことも評価できる。		
改善のための提言		次年度の補充人事の円滑な実施が望まれる。また、各教員の業務の分担という意味では、オープンキャンパスの模擬授業・学部説明、特別入試や一般入試の監督・面接等では公平性が担保されているものの、一部の分野では、各教員のボランティア的かつ献身的活動に負うことも大きいので、学部教員間の一層の連携が望まれる。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

No	評価基準	学生支援	
8	中期目標	留学を必修とする学部であることに即した学生支援の体制を強化する。	
	年度目標	SAの実施にあたって、学部教職員と関連事務部局等による学生支援をさらに充実させる。	
	達成指標	グローバル教育センターの機構改革に伴う SA 関連業務の移管に対応し、学部教職員を中心とする関係者間の連携を確認し、課題を抽出する。	
	年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	SAについて、学部事務と教員との協力にもとづく業務体制が発足・機能し、学生へのよりきめ細やかな対応・ケアを実施するなかで今年度 SA を実施することができた。
		改善策	教職員の人的資源の限界を踏まえつつ負担のバランスを図るなかで、効率的かつ学生にとってさらに行き届いた支援体制を構築する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	SAについて学部事務と教員の共働による業務体制が発足し、学生に対するきめ細やかな対応が可能になったことは大いに評価できる。		
改善のための提言	学生に対するきめの細やかな対応やケアは継続して行われることが望まれる。同時に、学生に対する公平性の担保も重要であって、SA の免除や 2020 年度から実施される 2 年次のゼミ履修が、学生間の公平性にどのような影響を与えるか、注意深く見守る必要があるだろう。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
9	中期目標	学生を含む学部関係者の国際展開力を活用した、社会貢献や地域との連携を目指す。	
	年度目標	都心に位置する地の利があることを念頭に置きつつ、近隣に存在する各国の文化機関や、国内外の諸地域等との連携を志向していく。	
	達成指標	FIC オープンセミナー等の行事について、企画・実施にさらに多くの学部教員の関与を図るとともに、社会貢献・社会連携の観点から周知し参加を促進する。	
	年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	年度内において合計 7 回の FIC オープンセミナーを、大学外の組織・団体の協力も得て開催し、大学内外から多くの参加者を迎えることができた。
		改善策	広報手段として学部 HP、学部の Twitter および Facebook と複数のメディアを活用したが、さらに、学会ウェブサイトとの連携を図る。
質保証委員会による点検・評価			
所見	これまでと同様に、FIC オープンセミナーを活発に行い、学部理念に沿った情報を学部内外に発信し、多くの来場者を得ていることは、大いに評価できる。		
改善のための提言	広報手段としての情報発信の多様性が求められるため、FIC オープンセミナーと学部 ウェブサイトの連携がもっとも重要だろう。特に、教員間の連携と協働は必要不可欠であり、それを実現するための十分な、教授会レベルでの議論が望まれる。		
<b>【重点目標】</b>			
<p>最も重視する年度目標は、「学生支援」に挙げた「SAの実施にあたって、学部教職員と関連事務部局等による学生支援をさらに充実させる」である。2019 年度よりグローバル教育センターの機構改革により SA 実施に関わる教学的意味合いの強い業務が学部へと移管されることになった。これに対応して、SA 前から SA 期間中、さらに SA 終了後にまで至る教育指導を有機的に構築・推進するために、教員と職員が一体となった協働関係のもとで、それぞれの負担に配慮しながら一層きめ細かな指導体制を確立するように努める。</p>			
<b>【年度目標達成状況総括】</b>			
<p>最も重視する年度目標として上記「重点目標」に掲げていた、「学生支援（必須項目）」、とりわけ「SAの実施にあたって、学部教職員と関連事務部局等による学生支援をさらに充実させる」に関し、初年度における業務体制のスムーズな移管を実現し、学生への緊密なケアを行うなかで、今年度の SA を順調に実施することができた。他項目についても、新カリキュラムの点検作業、ミニマム・リクワイアメントの設定など、中期目標の達成に向けて着実な作業を進めることができた。A 評価とした項目でも、国際文化情報学会 HP の立ち上げにより、学部の理念・目的の周知に欠かせない基盤整備が行えたと考えられる。</p>			

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

## 【2019 年度目標の達成状況に関する大学評価】

国際文化学部での、2019 年度目標の達成状況は 9 項目中 8 項目の目標を達成できている。最も重視する年度目標として「重点目標」に掲げられていた「学生支援（必須項目）」については、SA について学部事務と教員の共働による業務体制が発足し、学生に対するきめ細かな対応が可能になり、高く評価できる。他項目についても、新カリキュラムの点検作業および共通ルールの作成や、授業の到達目標の前提となるミニマム・リクワイアメントの設定など、中期目標の達成に向けて着実な作業を進めており、高く評価できる。唯一 A 評価とされた「学部の理念・目的の一層の周知」についても、FIC オープンセミナーなどのイベントは多数開催されており、国際文化情報学会 HP の充実による目標の達成が期待される。

## IV 2020 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	「自由と進歩」の精神に基づき、異文化間の諸問題に対話の回路を作り、新しい相互理解や可能性を生み出す学識や意欲を持った人材を育成する。
	年度目標	学部における学生や教職員の活動やイベントの開催、多様なメディアによる情報発信を通じて、学部の理念・目的の一層の周知を図る。
	達成指標	国際文化情報学会ウェブページにおけるコンテンツの充実を図り、学部におけるイベントの開催・研究活動について学部がもつ複数の情報発信手段（HP、SNS）の特性を活かした情報発信を行う。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	内部質保証に関して、適切で実現可能な学部内システムを構築し、有効に機能させる。
	年度目標	学部の中核となる 5 委員会（学部入試委員会、企画・広報委員会、教務委員会、演習・卒業研究運営委員会、FD 委員会）の代表者が構成する教育質保証委員会の活動を通じ、年度目標・中期目標の円滑な実現を図る。
	達成指標	執行部と質保証委員会の連携体制を維持しつつ、質保証委員会が学部の制度設計に果たす役割についての検討を行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	カリキュラムの順次性・体系的やグローバル化を念頭に置きつつ、教育課程・教育内容の一層の充実を期す。
	年度目標	新型コロナウイルス感染症の拡大という事態下において、カリキュラムに関する課題を洗い出し解決にあたることで、学生の能力育成と国際性の涵養に努める。
	達成指標	SA の中止に対応し、SA 先での学習の代替となる学部専門科目の履修年次の見直しなど、必要に応じたルールの見直しを行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	ICT 機器や新たな教育方法も適切に取り入れながら、双方向の授業を展開するとともに、学生の能力開発を軸とした学修の実質化を図る。
	年度目標	新型コロナウイルス感染症の拡大という事態を受けて、適切な形での遠隔授業の実施を図るとともに、新カリキュラムの順調な運用を目指す。
	達成指標	遠隔授業の実施状況や問題点についての分析・把握を行うとともに、新カリキュラムの改善すべき点について引き続き洗い出しを行い、適切な対応を行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	学生の学習に体系的な到達目標を設定することで、卒業生の専門性や学部の教育研究の水準を質的に向上させる。
	年度目標	学生のスキルや専門性の深化が学部専攻科目や演習を中心とする教員の教育活動を充実させ、ひいては教員の研究活動の深化につながるという考えをさらに徹底する。
	達成指標	学部における体系的な到達目標の設定についてさらに議論を進め、一定の結論を得る。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	アドミッション・ポリシーに基づき、多様な学問的関心および意欲、将来への展望をもった志願者を受け入れ、法政大学全体の教育研究の質的向上に貢献する。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	各種の入試経路について、アドミッション・ポリシーに基づき、志願者動向や手続き率にも注意しつつ、多様な志願者を受け入れられるよう引き続き改善に努める。
	達成指標	新たに設定される留学生入試を含め、いずれの入試方式についても、全学入試委員会で提示される課題を慎重に検討し、学部中期目標に照らして適切な対応を行う。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	学部の理念・目的により即応した教員組織を目指すとともに、その中で教員間の有機的な連携が図れるようにする。
	年度目標	研究、教育および学部運営の3方面から、教員の協働 (coproduction) のさらなる円滑化を図る。
	達成指標	学部の理念・目的に即応し、教員の円滑な協働を可能とする補充人事を実施する。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	留学を必修とする学部であることに即した学生支援の体制を強化する。
	年度目標	2020年度におけるSAの実施中止という事態に即応して、学部教職員と関連部局等による充実した学生支援を実施する。
	達成指標	2021年度のSA準備およびSA代替措置の設定・実施にあたって、学部教職員を中心とする関係者間の連携を確認し、課題を抽出する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	学生を含む学部関係者の国際展開力を活用した、社会貢献や地域との連携を目指す。
	年度目標	都心に位置するという地の利を念頭に置きながら、近隣に存在する教育機関や各国の文化機関、国内外の諸地域との連携を志向してゆく。
	達成指標	学部主催の行事について、社会貢献の観点からの周知を行い、学生・教員の参加を促進するとともに、千代田コンソーシアムへの参加・関与を拡大する。
<p><b>【重点目標】</b>          上記年度目標のうち最も重視するのは、「学生支援」に挙げた「2020年度におけるSAの実施中止という事態に即応して、学部教職員と関連部局等による充実した学生支援を実施する」である。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b>          新型コロナウイルス感染症の拡大のため決定された2020年度におけるSAの中止にともない、2021年度におけるSAの実施準備、およびSA先における学習の代替となる学部授業の設定・実施について、教員と職員が一体となった協働関係のもとで、学生間の公平性に配慮しながら、着実に進めてゆく。</p>		

### 【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

国際文化学部では、中期目標、2020年度目標ともに現状分析を踏まえており、適切かつ具体的に設定されている。特に、「教育課程・学習成果」および「学生支援」については、新型コロナウイルス感染症の拡大という事態を受けて、「適切な形での遠隔授業の実施」や「SA実施中止という事態に即応して、学部教職員と関連部局等による充実した学生支援を実施」といった目標が設定され、「SA先での学習の代替となる学部専門科目の履修年次の見直し」などの対応策も示されており、高く評価できる。

### 【大学評価総評】

国際文化学部は、2019年度より新たに新カリキュラムを導入し、教育課程の達成17項目のうち12項目で改善が見られた。特に、学生間の公平性とカリキュラムの順次性・体系性を確保するため、演習（ゼミ）履修における優先順位の決定や、大規模授業の履修における抽選選抜作業の実施などのルールが教授会で慎重に検討された上で策定されており、学部教育方針の実現のための優れた取り組みである。SA/SJプログラムを中心に置き国際性の涵養に積極的に取り組んでいる点、学部規模から少人数での教育・指導が可能である点、ICT（情報）教育を重視しインターネット上の複数のポータルサイトを活用している点、以上の3点を有機的に関連付け、体系的に構築した教育課程を提供しているのは高く評価できる。また、教員・教員組織についても、FD活動や研究活動を積極的に行い、FICオープンセミナーとして学内外の人的交流の推進と研究活動の活性化を図っており、高く評価できる。

2019年度目標は9項目中8項目を達成し、中期目標に向けた改善策も示されている。2020年度目標は、新型コロナウイルス感染症の拡大という事態を受けて、具体的な対応策も含めて適切に設定されている。特に、自宅でのeラーニングの

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

推進に関して、全面的な遠隔授業の実施による学部所属教員の知見の集積が期待される。

---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。